

8月第4週の礼拝 説教

■日 時：2022年8月28日（日）

■説 教：保科けい子 牧師

■説教題：「戸口に立って」

■聖 書：ヨハネの黙示録 第3章19-20節（新約p456）

■讃美歌：208「主なる神よ、夜は去りぬ。」430「とびらの外に 立ちつづけて」

立川教会にまいりましてから、私自身の礼拝説教の内容を大きく変更しました。どのように変更したかと言いますと、以前は、主日礼拝の説教では必ず、旧約聖書一か所と新約聖書一か所とを関連付けてお話ししていましたが、立川教会では、今までのところは新約聖書のみを取り上げてお話ししております。しかし本日の説教については、準備をしているときに、やはり旧約聖書の創世記3章6節～12節と関連付けながら一緒に考えていくほうが良いと思いましたので、そのようにお話しいたします。まず、その箇所を読んでおきます。旧約聖書4ページになります。

6 女が見ると、その木はいかにもおいしそうで、目を引き付け、賢くなるように唆していた。女は実を取って食べ、一緒にいた男にも渡したので、彼も食べた。7 二人の目は開け、自分たちが裸であることを知り、二人はいちじくの葉をつづり合わせ、腰を覆うものとした。

8 その日、風の吹くころ、主なる神が園の中を歩く音が聞こえてきた。アダムと女が、主なる神の顔を避けて、園の木の間に隠れると、9 主なる神はアダムを呼ばれた。

「どこにいるのか。」

10 彼は答えた。

「あなたの足音が園の中に聞こえたので、恐ろしくなり、隠れております。わたしは裸ですから。」

11 神は言われた。

「お前が裸であることを誰が告げたのか。取って食べるなど命じた木から食べたのか。」

12 アダムは答えた。

「あなたがわたしと共にいるようにしてくださった女が、木から取って与えたので、食べました。」

この個所は、神さまによって最初に造られた人間アダムが、共にいるように造られた女から与えられて、女の言葉によりますと、神さまが「**食べてはいけない、触れてもいけない、死んではいけないから**」とおっしゃったという果実を食べてしまった場面です。アダムと女は神様からの命令をきちんと認識しているがゆえに、はっきりと罪の自覚を持っていました。ですから、主なる神様の顔を避けて園の木（こ）の間（ま）に隠れるのです。そのアダムに向かって、主なる神様が「**どこにいるのか**」と呼びかけ応答を求められます。この箇所は口語訳の聖書では「**あなたはどこにいるのか**」と訳されていました。私は、その訳のほうが良いと思って読んでおります。なぜなら、その問いかけは漠然としたものではなく、具体的に「あなたは何者なのか」「あなたはどのように生きているのか」と問いかけていると考えられるからです。それに対して、アダムは「**あなたの足音が園の中に聞こえたので、恐ろしくなり、隠れております。わたしは裸ですから**」と答えます。注目したいのは、「**わたしは裸ですから**」という言葉です。実は、創世記という書物は、さまざまな言葉の技巧や編集の工夫がなされていると言われております。たとえば、その一つが語呂合わせです。「裸」は元の言葉では「アローム」と言いますが、これは「賢い」という言葉の「アルーム」と語呂合わせになっているのです。そうしますと、3章6節、7節で、「**女が見ると、その木はいかにもおいしそうで、目を引き付け、賢くなるように唆していた。女は実を取って食べ、一緒にいた男にも渡したので、彼も食べた。7 二人の目は開け、自分たちが裸であることを知り、二人はいちじくの葉をつづり合わせ、腰を覆うものとした。**」と述べられていることが、とても意味深く読めてまいります。「賢くなること」が「裸であることを知る」と関連あるというのですから、聖書は人間の根源的な苦しみを本当によく見ていると思います。「**あなたはどこにいるのか**」という主なる神様の問いに対して、「私はここにおります」とはっきりと答えることができず、「**わたしは裸ですから**」と答えるアダムの答えには「裸の自分は何もない存在だから、生きている意味が全く分からない」と自分を閉ざさずにはいられないほど苦しんでいる様子もうかがえるのです。そして、今を生きる私たちもまた、最初の人間「アダムと女」同様、「**あなたはどこにいるのか**」という問いかけに対して「私はここにおります」とはっきりと答えることができないがゆえに、苦しむのではないのでしょうか。

けれども、3章8節から12節までの主なる神様と二人の人間との対話を今一度よく読んでみますと、ここには本当に深い慰めが記されていることが伝わってきます。9節では、神

様の顔を避けて、言い換えれば、自分がいかに神様に対して顔向けできないことをしてしまっただかということを知っている人間に対して、あるいは、自分が今どこにいるのかさえ全く分からない人間に対して、まず主なる神様ご自身のほうから「**あなたはどこにいるのか**」と呼びかけてくださっているのだ、と聖書は力強く語るのです。もちろん、神様は私たちがどこにいるのかということなど、最初からご存知なのは言うまでもないでしょう。しかし、あえて、「**あなたはどこにいるのか**」と呼びかけてくださっているのです。その呼びかけの中に、ご自分がお造りになった人間を決してお忘れになってはおられないという神様の愛を見ることができれば、私たちはまた新しく生きることができるのです。ここに、私たちは神に知られている存在であることの本当の慰めがあると思います。よく引用される言葉ですが、そのことをこれ以上に的確に言い表している言葉を私はほかに知りませんので、それをお読みします。キリスト教の有名な人物で4～5世紀(354～430)生きた教父に、アウグスティヌスがあります。彼が書いた『告白』という書物の(397～400)の最初のほうに、「**あなたは私たちを、ご自身に向けてお造りになりました。ですから私たちの心は、あなたのうちに憩うまで、安らぎを得ることができないのです。**」(『告白』第一巻第1章)とあります。そして、アウグスティヌスの『告白』第一巻の第1章は「**神を讃えようとする意志は神自身によってひきおこされる**」と始まるのですが、私は、そのようなことが起こるときこそ、まさに私たちが「**あなたはどこにいるのか**」と呼びかけてくださる主なる神様の声を聞き分ける時だと思うのです。では、神様を讃美する私たちの意志を神様ご自身によって引き起こされるというのは、いったいどのようなことなのでしょう。先ほど読んでいただいた本日の聖書箇所(ヨハネの黙示録3章20節)をご一緒に読んでみましょう。「**見よ、わたしは戸口に立って、たたいている。だれかわたしの声を聞いて戸を開ける者があれば、わたしは中に入ってその者と共に食事をし、彼もまた、わたしと共に食事をするであろう。**」そこには、十字架におかかりになり復活なさって神様の右に座しておられる主イエス・キリストが、やがて私たちのところに再臨なさるときに、どのようにして私たちのところにお出でになるか、ということが語られています。注意したいのは、「**だれかわたしの声を聞いて戸を開ける者があれば**」と記されていることです。決して、戸をたたく物音に気づいて戸を開けるというのではないのです。主イエスの声を聞いて戸を開けるのです。その声こそ、創世記3章9節に記されている「**あなたはどこにいるのか**」という問いかけではないでしょうか。言い換えますと、旧約聖書の最初に置かれている創世記のその問いかけは、新約聖書の最後に置かれている黙示録に至って、イエス様ご自身が私たち一人ひとりを訪ねてくださるという仕方で完結しているのです。ですから、私たち1人1人の心には必ず神様への扉が造られているはずですが、その扉は私たちの内側からしか開けられないものでもあるのです。だからこそ、私た

ちは常に耳を澄まして、ヨハネの黙示録の著者ととも「アーメン、主イエスよ、来てください。」と願いたいと思います